

第6講 構想・立案・材料の準備

田中重人 (東北大学文学部准教授)

[テーマ] レポートの構想を立てる

1 句点と読点

句点 (。) またはピリオド (.) = 文の終わりに打つ

読点 (、) またはコンマ (,) = 文の内部構造を示すために打つ

[、 と 。] の組み合わせ …… 通常の文章 (この授業ではこれを推奨)

[、 と 。] の組み合わせ …… 官公庁の文章 (の一部)

[、 と .] の組み合わせ …… 数式や英文を多用する文章 (教科書の用法)

2 読点の打ちかた

2.1 係り受けが遠く離れている場合

[例文] これらの図を使って説明すると、学生は、日本文における「主語」の不在を、すんなりと理解してくれる。

遠いほうから順に打つこと。

[×] これらの図を使って説明すると学生は日本文における「主語」の不在を、すんなりと理解してくれる。

[×] これらの図を使って説明すると学生は、日本文における「主語」の不在を、すんなりと理解してくれる。

[○] これらの図を使って説明すると、学生は日本文における「主語」の不在をすんなりと理解してくれる。

2.2 並列の要素同士を区切る

[例文] 京都、大阪、奈良に行った。

[例文] ……能力や学力、あるいは学業成績によって…

[例文] 技術が進歩し、企業経営の計画性が高まってくると…

並列要素を区切るには、読点以外の記号や接続 (助) 詞も使える。できれば、読点を使わずに済ませるほうが望ましい。

2.3 間接引用 (的な表現) を囲む。

[例文] Hall は、キャリア概念がとらえどころのないものになってしまうのは、この概念に4つの異なる意味が含まれているからだ、と述べている。

[例文] 統計解析ソフトの普及にともなって、計算プロセスの理解がないままに複雑な統計手法をつかった論文が量産されるようになる、などの弊害が指摘されている。

この用法では、文節の途中に打つことが多い。なお、直接引用の場合はカギ括弧「」で囲む。

2.4 間投詞のあと；強調や息継ぎや間を示す文学的／会話的表現など

[例文] ああ、それなら、わかる。

[例文] そうだ京都、行こう。(JR 東海のキャッチコピー)

論文の文章でこの用法をつかうことはめったにない。

2.5 課題

自分がこれまでに書いた文章を題材に、読点の打ちかたを考える (提出不要)。

- 上記の分類ではどの用法が多いか
- 省略できるところ、打ったほうがよいところ、どちらでもよいところ
- 読点以外で代用できるところ

3 構想を立てる

3.1 準備と方法

まず、材料を集める。中間レポートでは「素材」が決まっているので、そこから注目すべきところについて付箋をつけたりカードに書き出したりするとよい。

材料が集まったら、どんな順序に並べるか、どういうセクションを立てるかを定める。いずれにしても、文章を書きはじめる前に、紙の上で構成を考える。この時点で、鍵になる用語を決め、概念の定義をしておくとい

3.2 構成表

配列と構造を考えながら、大きい紙に項目を書き並べる。色ペンなどを活用するとよい(教科書 pp. 52–53)。

3.3 スケッチ・ノート

ひとまとまりの項目を小さいカードに書き出す。それらのカードを並べて、配列を考える。色ペン・輪ゴム・ホチキスなどを活用して、まとめていく(教科書 p. 54)。

- カード1枚が1パラグラフに対応する →トピックがはっきりしている必要がある
- 広い場所が必要である

3.4 暫定的目次

- 構成ができたら、各セクションの見出しをつけて、まず目次から書きはじめる
- 目次は、本文を書き進めるにしたがってどんどん変更する
- 項目の取捨選択も重要である

4 次回の準備

次回は中間レポート草稿の相互批評をおこないます

- 草稿を2部準備
- 赤ペン、その他の色のペン、国語辞典を準備